

## 【「共助」の遺産】

沖縄県 粟国村立粟国中学校

二年

小谷 こたに 杏奈 あんな

「このトゥージに溜めた雨水を飲んで衛生的には大丈夫だったんですか？」  
「このような大きな石をどこから持ってきたんですか？」

観光客が質問してきます。しかし、私はきちんと答え返すことができませんでした。中学生で島のボランティアガイドをしよう！そうして、活動をスタートさせた私達。中学生の目線で、島のエピソードを集め、ありのままに島をガイドすることにしました。そのエピソードの一つが、島の文化遺産とも言えるトゥージについての紹介をすることです。

「このトゥージは、水道がない頃に、雨水を溜めて使っていた入れ物です。現在でも粟国島にはこのトゥージが残っている家が多いです。トゥージについての歴史を調べていくと水道がない時代の島の苦勞を知ることができます。今では、きれいな水草を活けたりして、庭のちよつとしたアートになっています。溜めた水を庭の草花への水やりに使ったりしています。」

このように説明していた私たち中学生ボランティアガイドの誰もが、改めて島の水の歴史について、何も分かっていなかったことを思い知らされました。

私は初めて祖母に聞きました。祖母の幼少期の体験は、今の私の生活から想像もできないものでした。

「近くの溜め池から水を汲み、一斗缶（18ℓ）に入れ、家まで運んでくるのが毎日だった。」  
「片道20分の道をトゥージが満杯になるまで何回も往復した。」  
「お風呂は毎日入れない。貴重な水だから毎日のお風呂に使うのはもったいない。」  
「雨が降ったら外に出て髪を洗った。」  
「夏は海で体を洗った。」

自分達の住んでいる粟国島が、昔から水資源に恵まれず、島民たちは水を確保するためにとても苦勞してきたことを祖母は語ってくれました。生活を支えるために、一日一日に必要な水を汲み、運んでいた祖母の必死な様子が伝わってきます。

「トゥージ」は水を溜める容器のことです。丸みを帯びていて巨大なお茶碗のように見えます。島の西海岸にある凝灰岩をくり抜いて造られ、大きいものでは約1トンもあったそうです。その重い石を運ぶために島の大人たちが数十人集まり交替しながら、船も使い、約70人を超える人手が必要なこともありました。多くの人の苦勞と時間をかけて運び造られたトゥージは、大切な財産として親から子へ代々受け継がれ、今もなお島のあちこちの庭先で見ることができます。トゥージは島民が力を合わせて造った、水資源を確保するための大切な容器だったのです。

今、世界はコロナパンデミックをどのように乗り越えていけばいいのか、大きな課題と向き合っています。感染を防ぐために、手洗いの徹底など、衛生面の予防対策も必要です。しかし、世界人口の約10人中3人の割合で、安全な水の確保が難しく、手洗いの水以前の問題の方が深刻です。汚れた水が原因で命を落としてしまう子どもたちもいるのです。かつての祖母のように、今でも世界では、幼い子どもたちが手に入るかわからない水を求めて歩き続けている状況があります。

私の住む粟国島の先人達は、厳しい島の自然条件や生活環境の中でも、お互い助け合ってコミュニティを築いてきました。それを象徴しているのがトゥージづくりだと思います。一つ一つが重くて巨大なトゥージは一人で作ることは困難でした。多くの人々の協力がないとできないことだったのです。

自分一人だけの安全や安定だけを求めず、水資源を確保するために、「共助」の心を持って先人達が造り上げてきた「トゥージ」。私達がこれからの時代を生き抜くための大切なメッセージを伝えていきます。